

ニュースレター

NO. 70

発行 / NPO 法人市民活動サポートセンターいなぎ
 事務局 / 〒 206-0802 稲城市東長沼 2112-1
 稲城市地域振興プラザ 1F
 TEL 042-378-2112 FAX 042-378-6971
 E-mail : info@i-inagi-support.org
 http : //www.i-inagi-support.org/

ウィズコロナ時代の子供たちの居場所づくり

2019年11月に初めて発生が確認され、翌2020年1月下旬には日本国内で初の感染者が確認された新型コロナウイルス。次々と変異を繰り返し、高い感染力で2年7か月が経過した今も、日本では第7波の感染拡大の最中にあります。この100年間で初めて経験するパンデミックに対して様々な対策が試みられ、私たちの日常生活に大きな影響を及ぼしました。

とりわけ子供たちは、修学旅行や運動会など学校行事の中止・縮小をはじめ、外出や友達との遊びを制限されるなど、本来なら成長期に必要なことを経験できず、心身に深刻な影を落としていると思われます。

今号のニュースレターでは、そんな子供たちの居場所づくりに取り組む市民グループの活動を紹介します。

増えるDV、虐待

報道などでは、コロナ禍により引きこもりや不登校になる子供が増えていると言われています。では稲城市の小・中学校ではどうなのか、教育委員会にきいたところ、不登校の児童生徒はコロナ禍以前から一貫して増加する傾向にあるものの、コロナ禍の期間に急激に増えたという状況ではないとのことでした（下表参照）。

一方、子供や子育てに関する相談に応じ、児童虐待にも対応している子供家庭支援センターに家庭内の状況をきくと、次のように話してくれました。

市立小・中学校における不登校児童生徒の割合

	不登校児童生徒の割合 (%)	
	小学生	中学生
平成 27 (2015) 年度	0.29	1.68
平成 28 (2016) 年度	0.42	2.20
平成 29 (2017) 年度	0.57	2.77
平成 30 (2018) 年度	0.67	3.03
平成 31 (2019) 年度	0.81	3.51
令和 2 (2020) 年度	0.90	3.38

年度内に連続または断続的に30日以上欠席した児童生徒数の割合。病気や家庭の事情、新型コロナウイルス感染回避による欠席は含まない。



コロナ禍前のFFネットワーク陽だまりスペースの様子

「センターに寄せられる相談案件は、虐待や養育困難などの『養護相談』、育児しつけや家庭環境・不登校などの『育成相談』、障害児支援を行う『障害相談』、出産後の養育について出産前から支援を行う必要が特に認められる特定妊婦への『保健相談』等があります。

このうち、養護相談の案件数は、コロナ禍前の平成31年度は299件で、そのうち虐待に関するものが154件ありました。それがコロナ禍の令和2年度は418件（うち虐待194件）に増え、令和3年度は384件と案件数こそ減りましたが、虐待は204件と増加傾向が続いています。

令和2年度になって増えたのが、夫婦喧嘩等により子供がいる前でパートナーや家族に暴力をふるう『面前DV』（心理的虐待にあたる）です。リモートワークが広がり、家庭内にイライラが募っていることが虐待件数の増加につながっていると思われます。

また、コロナ以前から不登校に関する相談も増えていました。コロナ禍で外出が制限された子供たちは、インターネットのゲームをやりながらチャット機能で友達とつながって寂しさを紛らわしていましたが、やがて学校に行かずにゲームで友達とつながることが当たり前になってしまったというケースも増えています。

子供家庭支援センターでは10人の相談員が対応していますが、常に250～300の相談案件があり、稲城を管轄する多摩児童相談所も独自に案件を抱えているので、稲城

市内では常に 400 件ほどの相談案件が同時進行しています。それでも稲城は、多摩地区の他市に比べると少ない方なのだそうです。

「公園で遊ぶ子供がいないなど、まちの様子と相談案件の多さには相関関係があるように感じます」と同センターの職員は言います。それは、大人たちがどれだけ自分たちの地域に関心を持ち、暮らしやすい地域の人間関係づくりに取り組んでいるか、の違いなのかもしれません。

居場所づくりの先駆者 いなぎ FF ネットワーク

城山文化センターを拠点に、主に稲城第 5 中学校ブロック（向陽台・長峰・百村地区）に住む中学・高校生の居場所づくりに取り組んでいるのが、「いなぎ FF ネットワーク」です（FF は、フレンドリー & ファミリーの意）。ニュータウン地区にある稲城五中の生徒たちを受け止める“居場所”が地域にないことに気付いた当時 5 中 PTA の有志により、2001 年 9 月に活動が始まりました。

中高生の子供たちが親でも先生でもない第三者の大人との関わりを持つことで、多感な思春期を上手に乗り越えてほしいとの思いのもと、自由におしゃべりしたりゲームをしたりしてホッと一息つける「陽だまりスペース」、定期試験や受験勉強にも対応する「学習支援」、バドミントンや卓球などで身体を動かす「プレイルーム」を活動の三本柱に、毎週水曜日の 16 時～19 時半に居場所を提供しています。また、金曜日には登録制の学習室も開いています。

コロナ禍前の 2018 年度は年間約 1,600 人の子供が参加していましたが、子供たちは外出しないことが当たり前になってしまった 2020 年度は、約 250 人と減少。感染拡大防止で活動が制限される中、スタッフは「コロナ禍で子供たちを取り巻く状況が一変したからこそ、居場所を継続することに意義がある」との思いを強くし、「子供たちに寄り添い、真摯に向き合い、彼らの悩みや不安を受け止め、支援していく」という基本姿勢を再確認しました。参加者数こそ減りはしましたが、子供たちとの雑談の中から「話せてよかった」「気持ち楽になった」「会えてホッとした」「勉強が分かるようになって嬉しい」などの言葉が

聞こえてきたそうです。

現在は徐々に参加者も戻りつつあるようですが、今後は SNS を通じた子供たちへの活動周知など IT の活用力を向上していくほか、引きこもりや不登校、発達障害、外国籍子女の増加といった現代の子供たちをめぐる問題に対応できるスタッフの育成にも取り組んでいきたい、とのことでした。

【学習支援活動の支援者（教務 & サポート）を募集中です。連絡は西田さん yunishida@tbz.t-com.ne.jp まで】

若葉台で多世代交流を続ける つながりヨ

若葉台の i プラザ会議室を拠点に、青少年育成若葉台地区委員会（青少育）と地域の高齢者グループが主体となって 2010 年 5 月にスタートしたのが「若葉台みんなの居場所つながりヨ」です。

若葉台地区は核家族世帯が多く、当時は住民同士の関係も稀薄で、ボール遊び等ができない公園もあり、子供たちは携帯ゲーム機を持ち寄って遊んだりしていたそうです。そんな中、青少育のメンバーで話すうちに「子供が育つのに最高の環境は地域コミュニティが充実していること。核家族だと家庭の中だけで問題を抱えてしまい、外に相談できない。それでは親も大変だけども子供も大変。一方で、年長者の方々から知識や経験を教わることは、私たちや子供の心に大きなプラスになる。そのような交流ができる、家庭でも学校でもない第三の居場所が必要だ」との結論に至り、子供同士・大人同士・子供と大人がつながれる「昭和の長屋」のような近所付き合いの場を目指して行動を起こしました。

文化センターや児童館のない若葉台地区で、初めは居場所の“場の確保”に苦労しましたが、自治会や PTA など地域の諸団体の賛同を得て i プラザの大会議室を利用することになり、現在は毎週水曜日の 15 時～17 時に小学生、17 時～19 時は中学生を主な対象に、地域の高齢者やママさんたちも加わって、ボードゲームやカードゲーム、綿棒で作る幾何学模様の立体やプレスレット、チャームのク



初めて来たときは「こんな場所があるんだ！」と驚いたけれど、学校や部活のことを第三者の大人に話すのは楽しい、と参加している中学生は話してくれました



コロナ禍を経て、子供たちはもちろんスタッフとその家族の健康や安全にも配慮し、活動時間を短縮するなど長く活動を継続できるようにリニューアルしました

ラフト工作などを楽しみながら、思い思いに交流しています。

活動のスタート時から参加している高齢者の方は「一緒にゲームをしていると、子供たちの瞬発力や記憶力などが本当に素晴らしく、自分も刺激を受けて若返れます」、お子さんを連れてきたママさんは「きょうだいで連れてきて、それぞれ友達とゲームしたり工作したりして楽しんでいます。親としても安心して遊ばせられる場所です」と話してくれました。また、小学1年生の頃から参加している高校3年生のYさんは、「ここは家でもなく学校でもない不思議な場所だけど、ホッと安心できる場です」と笑っていました。

【一緒に活動するスタッフを募集中です。連絡は白石さん takane.shiraishi@gmail.com まで】

居場所づくりの団体がつながる

コロナ禍により地域コミュニティのつながりが弱まり、孤立化が進むなど、すべての年代で「地域の居場所」が求められているなか、市内で「居場所づくり」に取り組んで

いる団体が初めて一堂に会し、情報交換や意見交換を行いました。参加したのは、いなぎFFネットワーク、まなびナビ、わくわくサイエンスラボ、つながリーヨ、稲城5中ブロック学校支援コンシェルジュ、NPO法人はらっぱの会、インクルーシブフォレストの各団体です。

近所付き合いが希薄になる一方で、子供をめぐっては不登校や引きこもり、発達障害、外国籍子女の増加などが新たな問題として顕在化し、親としてもなかなか悩みを相談できる場がありません。若い子育て世代も昔ながらの分け隔てない近所付き合いを求めているながら、実際にはそうならない現状のなか、「地域の居場所づくり」に取り組む団体がつながることで、相互に相談し合ったり足りない部分を補い合える関係構築を目指したものです。今後も会合を継続していく方針です。

子供たちが健やかに伸び伸びと成長できる環境を創るために、まずは地域の大人たちが知り合い、気安い近所付き合いができる関係をつくっていくことが必要なのかもしれない。

(文責・種田匡延)

子供たちが作り上げた「宇宙のまつり」

去る5月1日、稲城長沼駅高架下のくらすクラス広場で「宇宙のまつり」が開催されました。

このまつりの最大の特徴は、子供たちが、決められたことをやるのではなく、自分たちで考え作り上げる体験ができるイベントであることです。子供たちは仮想通貨「うちゅ〜ん」を使って、「伝える、人と関わる、お金とは何か」について楽しく学びました。

子供たちが企画した「こども店舗」では、スライム屋さん、的あて、竹工作など14店舗、約40名が「こども店長」として働きました。また、子供たちが実際にお店で働き、仮想通貨をかせぐ「こどもバイト」の企画も大人気でした。

子供向けのワークショップでは、稲城、多摩、八王子地区のクリエイターが11店舗の出店をしました。

決められた枠の中で決められたことをするのは、子供たちの好奇心や探求心を満たすことはできません。子供店長、バイトを経験した子供たちは、イベントを通じて自信を持った表情をしていたのがとても印象的でした。このおまつりに参加した子供店舗14店舗、子供向けワークショップ11店舗は、すべて主催者である網蔵ゆうこさんのコネクションで集められ、当日は小雨にも関わらず延べ1,000名程度の来場があり、大盛況のうちに終わりました。

市民活動サポートセンターいなぎも後援事業として協力しましたが、稲城市の新たなおまつりとして定着していくことを期待しています。

手づくり市民まつり 3年振りに復活



多摩ニュータウン活性化のため、「ガーデンシティ多摩」というお祭りが1983年から始まり、一定の成果を収めたことで中止となりました。しかし市民からは「続けたい」という声が多く、市民の手で続けることになりました。

テント・机・イス・車両借用、そして要員確保はどうする？ 難題山積の中、とにかく若者のエネルギーでスタートし、全てを市民の手作りで開催しました。

それから20年、フリーマーケット、出店、出演など収入の柱も軌道に乗り安定してきました。昨年、一昨年とコロナ禍で中止になっていましたが、今年は早くから「今年こそやろう！」との声上がり、5月4・5日に城山公園で無事に開催することができました。

■第21回 Iのまちいなぎ市民まつり

2年間、コロナウイルスのまん延により中止となっていたIのまちいなぎ市民まつり。今年は感染対策に配慮しながら実施を予定しています。市民の皆さんが久しく待っていた賑わいのあるまつりをともに実現させましょう。

日時：令和4年10月21日(金)～23日(日)

オープニング10月22日(土)10:45～

場所：稲城市総合体育館周辺

部門：ふれあいまつり部門（おまつり広場、子供イベント、フリーマーケット他）

産業まつり部門（びっくり市、工業展、農産物品評会他）

交通安全市民のつどい部門（自転車シミュレータ、白バイ・パトカー展示他）

市民文化祭・芸術祭部門（市民文化祭展示、芸術祭、将棋大会他）※ステージ部門は11月19・20日に開催

ファミリースポーツフェスタ部門（スポーツイベント、ボルダリング体験他）

■稲城市和太鼓まつりを開催します！

毎年、Iのまち稲城市民まつりの一環として恒例になっていた「和太鼓コンテスト」は、今年は市内の太鼓団体を中心にした和太鼓演奏会「稲城市和太鼓まつり」として開催します。

和太鼓演奏を通して稲城市を、そして市民まつりを盛り上げていこうという思いで、各団体が熱気のある演奏を繰り広げます。

皆さんお誘いあわせの上、お越してください。

日時：令和4年10月10日(祝)

午後1時開場 1時30分開演

場所：稲城市立Iプラザホール

入場料：無料

出演団体（順不同）：

- ①和太鼓「和」NAGOMI、②いなぎ太鼓、③鼓遊、④城山とんと鼓、⑤和太鼓鼓夢、⑥友遊クラブ、⑦鼓太郎、⑧だげきだん



■フォスターシティ市へのツアー参加者募集

昨年7月に姉妹都市提携を結んだ米国カルフォルニア州フォスターシティ市に行き、市民の皆さんと交流しませんか。稲城市姉妹友好都市交流協会の会員が同行しますので、英語が話せなくても大丈夫です。

詳細は決まり次第「稲城市姉妹友好都市交流協会」でお知らせします。

※個人旅行ではありません。

※旅費・宿泊費・その他経費は自己負担です。

※社会情勢その他の理由で、中止または変更になる場合があります。

日程：令和5年2月4日～8日

問い合わせ：稲城市姉妹友好都市交流協会事務局(サポートセンターいなぎ内) ☎042-378-2112

おしゃまします

ミライ地球人くらぶ

「小学校のとき授業で地球温暖化のことを知り、とても衝撃を受けました。そして戦争、飢餓、差別、世界の不均衡も知って、このままだと地球は大変なことになってしまう、と子供ながらに不安を覚えました。しかし先生や親、大人たちはまるで気にしていないように見えることが辛く、置き去りにされたような孤独感を感じながら大人になり、何もできない歯痒さだけが残っていました。

やがて親になり、やはり子供には、より良い世界を残したい、子供には自分で考え行動する力をつけてほしいと思うようになりました。

世界で起こっていることは自分の身の回りや地域につながっているのだと実感し、常に問題意識を持ち、自らアクションを起こしていけば、

自分たちの足元から愛や世界平和が広がっていくのだと、子供たちに伝えたい。子供の心に希望の種を撒きたい」

こんな思いを持った村松純香さんに共感し、SDGs（持続可能な開発目標）を入口として、それぞれに問題意識を持った平尾小学校PTAのママ友5人が立ち上げたのが、ミライ地球人くらぶです。

2021年度の発足後、読み聞かせグループとコラボして、SDGsをテーマにした絵本の読み聞かせ動画を平尾小の全教室に配信したり、平尾近隣公園で「みんなであそぶ日」を開くなど、PTA有志の会として存在感を発揮してきました。使い捨てカイロを回収し、加工して海や池の水をきれいにするプロジェクトに参加し



くらぶのメンバーや保護者がゆるく見守るなか、子供たちが学年や性別も関係なく自由に遊ぶ「みんなであそぶ日」。初回は100人ほども集まり、ドッジボールや大縄跳びなど大人数ならではの遊びを楽しみました

た際は、平尾小の有志児童による「子ども隊」のお手伝いも得て、50kgものカイロを回収したそうです。

「もっと活動の回数を増やして、多くの人に参加してもらいたい。地域の団体や高齢者の方たちともコラボして、ニュースポーツをしたり、ジェンダーやゴミの問題などSDGsについても掘り下げていきたい」と夢は大きく膨らんでいます。

連絡先：miraikikyujin@gmail.com